

近代イギリスにおける牧羊の歴史的意義

藤 田 幸 一 郎

はじめに

近代ドイツ農村・農業史に強い関心をもつ者として、筆者はドイツとイギリスの農業を比較して、両者の相違が両国の経済発展にどのように関連するのかを検討する必要性を感じてきた。とくにイギリスはヨーロッパの産業革命および農業革命をリードした国であるのに対して、ドイツは経済的に「遅れをとった国」といわれるだけに、なおさら強くその必要性を感じるのである。両国の農業の間にさまざまな違いがあるのはいうまでもないが、次のような相違は意外に知られておらず、ほとんど見過ごされているのではないだろうか。つまり、近代イギリスは畜産が盛んで農地面積の半分以上を牧草地に当てていたのに対して、ドイツ農業はむしろ穀物を中心として、農地面積のうち3分の2以上は穀物栽培に当てられていた。そのかぎりでは、イギリスは畜産国であったのに対して、ドイツは穀作国であったといってもよい。穀作中心のドイツ農業のタイプの方がヨーロッパでは一般的であり、イギリス農村における牧草地の多さはむしろ特異というべきだろう。酪農が盛んなオランダやデンマークにも牧草地は多いが、イギリスの畜産で最も重要だったのは牧羊であり、トロウスミスは「羊は国民経済の中心」をなしたと述べている¹⁾。イギリスは中世以来西ヨーロッパ最大の牧羊国であったといってもよく、今でもイギリス農村では羊を目にすることが多い。もちろんドイツでも羊は飼われたが、それほど多くはなかった。ドイツの畜産の特徴は何よりも森林を利用した養豚にあって、豚肉からつくられるドイツ・ソーセージは世界的に有名である。

イギリスではどうして畜産、とくに牧羊が盛んで、ドイツでは穀物、とくにライ麦の耕作に農業の重点が置かれたのだろうか。こうした問題はほとんどかえりみられたことがない。イギリスの「困い込み」運動やドイツの「農民解放」、「ユンカー」の研究は盛んにおこなわれてきたし、関心度もそれなりに高いが、イギリスの牧羊とドイツのライ麦耕作は、たんに農業の自然条件の違いによるものとみなされ、研究に値する重要な相違とはみなされなかったし、それが経済史的にどのような意味をもっていたのかという問題についても、追究されてこなかった。

この問題とのかかわりで注目すべきは、イギリスの羊毛生産についての経済史家パウアーの指摘である²⁾。彼女は、中世ヨーロッパの「素朴な自給自足の自然経済の景観」を打破した諸要因として、都市、輸出工業とくに繊維工業と並んで、農業におけるぶどう、畜産物、繊維工業用原料などの市場向け生産を挙げ、とりわけ牧羊と毛織物工業がはたした役割を重視する。なぜなら、牧羊も毛織物生産も自給自足経済を打破する性格をもっており、「羊毛生産地域はその主要市場を海外に見だし、毛織物生産地域は輸入原料ですべての仕事をおこなった」からである。彼女によれば、羊毛を生産する牧畜世界は「犁で耕す農民の世界」とは異質の世界であり、「工業地域が中世都市経済の素朴な景観を打破するように、牧畜地域は中世農村生活の素朴な景観を打破する。牧畜世界は耕種農業の世界とは異なった集落と異なった保有地をもつ世界である。」それは、「定住性が乏しく」、「自由で」、「非荘園的な」社会であった。ヨーロッパにおけるこうした「牧畜世界」と「耕種農業の世界」の違いは、イギリスとドイツの違いをとらえる手がかりとならないだろうか。

そこまで踏み込んだ大胆な議論ができないまでも、中世イングランドが「最大かつ最重要な高級羊毛の源泉をなし、織物生産と牧畜との相互依存関係における枢要の地位を占め」、「イタリアの毛織物工業のかなりの部分と低地諸国の産業のほとんどすべては、イングランドの羊毛に依存していた³⁾。」というパウアーの指摘は、うなずけるだろう。中世ヨーロッパ最大の羊毛輸出国であったイギリスは、近代初期にその原料を加工した毛織物を輸出する工業国へと転身することによって国富を築くことに成功した。イギリスの羊毛は、「国民的産業」としての

毛織物業繁栄の基盤をなしたといわれる。この過程は大塚久雄によってイギリス「農村工業」の勃興の歴史として描かれた⁴⁾が、イギリス毛織物工業が「農村工業」としていともまれたかどうかにかかわりなく、当時のイギリスがヨーロッパのどの国よりも良質で豊富な羊毛原料に恵まれていたことはたしかである。

なるほどドイツでも牧羊はおこなわれたし、毛織物業もそれなりに盛んではあった。15-16世紀のニュルンベルクは麻織物業とならんで毛織物業の都市としても知られたし⁵⁾、18-19世紀のザクセン王国はイギリスに対する最大の羊毛輸出国として台頭した⁶⁾。しかし、それらは一時的な現象にとどまり、羊毛生産も毛織物業もイギリスほどの普及にはいたらなかった。牧羊があまり普及しなかったため、イギリスのような広大な牧場も必要ではなく、囲い込みもおこなわれず、ようやく19世紀の「農民解放」と平行して「共同地分割」という名称でイギリス式囲い込みを模範とする農業改良がおこなわれはしたが、イギリスのように大規模ではなかった。ドイツの北海沿岸の低湿地帯はオランダに似た干拓地であったため、オランダと同様な商業的性格をもつ酪農が発達した⁷⁾が、それ以外の内陸では農地の大部分は穀物用地して利用され、農民の土地は多くの場合複雑に入り組んだ三圃制耕地からなり、囲い込みはそれに要する多大なコストに比べて経済的効果が乏しかった。とくに小農が多い南ドイツにその傾向が強く、囲い込みは遅々として進まなかった。

このようにドイツは穀物生産国の性格をもっていたのに対して、イギリスが牧羊国であったことは、近代における両国の経済発展の違いを理解するうえで重要な鍵となるようにおもわれる。そこで、牧羊がイギリスであれほど盛んにおこなわれたのはなぜか、またそれはいかなる経済的意義をもったのかという問題について、ヨーロッパ比較経済史の一環として検討を試みたい。

1 牧羊の地域分布

まず、イギリスにどれほど羊が多かったか、数量的に確認することから始めよう。古い時代の羊の数は正確には知られていないが、ポウドンによれば17世紀末のイングランドの羊は約800万頭で、当時の人口約500万人をうまわり、人間一

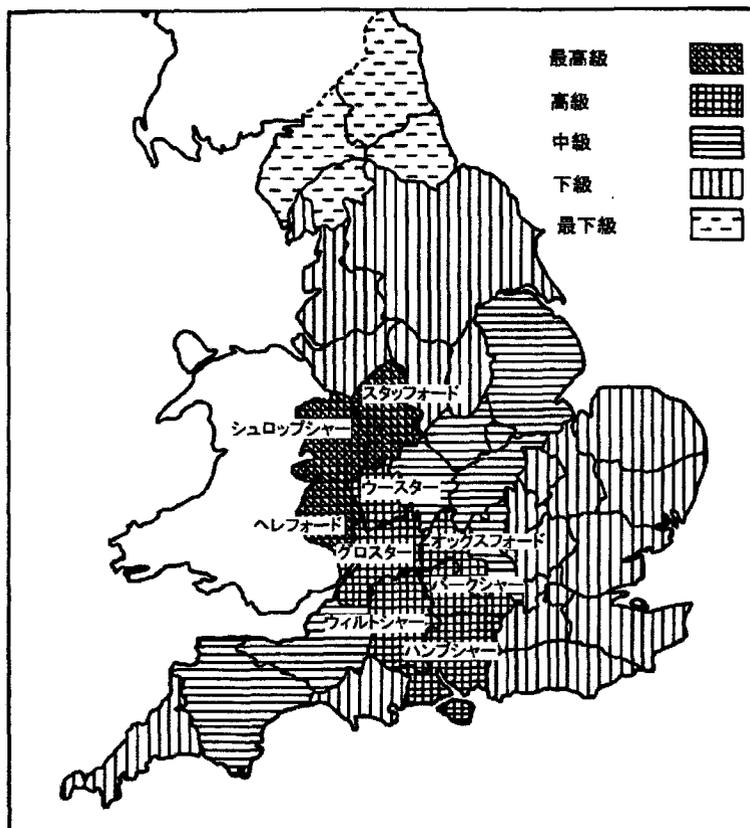
人あたり1.6頭の羊が飼われていたことになる⁸⁾。19世紀末になるとかなり正確な統計が存在し、マルホールの統計によれば、1880年代に西ヨーロッパ諸国のなかで羊が最も多かったのはイギリス(Great Britain)で、その数は2,900万頭に達し、次いでフランス2,300万頭、スペイン2,300万頭弱、ドイツ1,900万頭、オーストリア・ハンガリー1,400万頭であった⁹⁾。

ただし、19世紀末の時期にはすでにオーストラリアが世界最大の牧羊国に成長して7,700万頭の羊を数え¹⁰⁾、ロシアも4,700万頭の羊を有しており、イギリスはもはや世界最大の牧羊国ではなくなっていた。その第一の原因は、いうまでもなく産業革命期に綿工業が飛躍的發展をとげ、繊維工業の首位の座を羊毛工業から奪い取ったためである。それだけでなく牧羊そのものにおいても変化が生じ、17世紀よりスペイン産メリノ種の羊毛が最高品質と評価され、イギリス産羊毛を駆逐していったこともイギリス牧羊業の退潮の原因をなした。18世紀なかばにはメリノ羊はドイツのザクセン王国にも導入され、19世紀にはザクセンはヨーロッパの牧羊中心地として台頭し、イギリスはザクセンから羊毛を輸入するようになった¹¹⁾。だが、ザクセンの牧羊の繁栄も長くは続かず、19世紀にはオーストラリアがメリノ羊を導入して、19世紀末には世界最大の牧羊国に成長をとげていった¹²⁾。

イギリスは西ヨーロッパ最大の牧羊国の地位を長期間にわたって維持したが、イギリスのなかにも地域差があって、牧羊が盛んな地域とそうでない地域があった。しかも毛織物業の変化とともに、羊毛生産立地も移動した。この過程は、大略次のようにとらえることができる。

15世紀までイギリスはイタリアやオランダ、ベルギーなど大陸に羊毛を輸出していたが、16世紀にはイギリス国内でも毛織物業が盛んになり、とくに西部でいわゆる「ウールン」(woolen)と呼ばれた織物の生産が活発におこなわれ、大陸へ輸出された¹³⁾。「ウールン」は主に「短毛」を原料とし、縮絨されたうえで織られた厚手の毛織物であった¹⁴⁾。高級短毛種として名高かったのは、とくにウェールズに隣接するイングランド西部のヘレフォードやシュロップシャー産の羊毛だった¹⁵⁾。ところが、17世紀以降ヨーロッパの毛織物業は長毛を原料とする「ウーステッド」(worsted)の生産が主流となり、オランダからその技術をもつ

図1 イングランド各州の羊毛の品質(1600年頃)

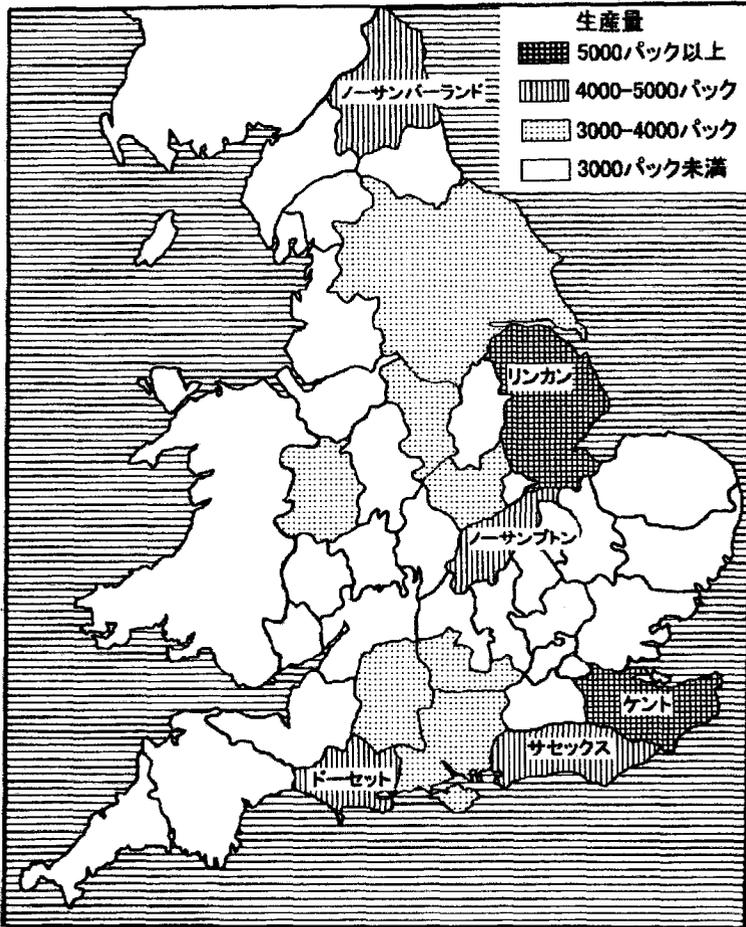


資料 : Bowden, The Wool Trade in Tudor and Stuart England, 1962, p.29.

た織布工がイングランド東部のノリッジ周辺へ移住し、ここを中心にウーステッド産業が隆盛を見た¹⁶⁾。長毛を供給した主な産地は、西部のコッツウォールズ、東部のリンカンやレスターであった。

1600年頃の優れた羊毛生産地を示したのが、図1である。これによれば、イングランド西部（ヘレフォード、シュロップシャーおよびスタッフォード）が最も

図2 イングランド各州の羊毛生産量(1700年頃)



資料 : Bowden, The Wool Trade in Tudor and Stuart England, 1962, p.40 より作成。

卓越した高級羊毛生産地であり、グロスターなど西南部がこれに次ぐ産地であった。これらの大部分は短毛生産地であったが、コッツウォールズのような長毛生産地もそのなかに含まれていた。

これより後の時代になるが、1700年頃の羊毛生産の多い地域を図2に見ると、

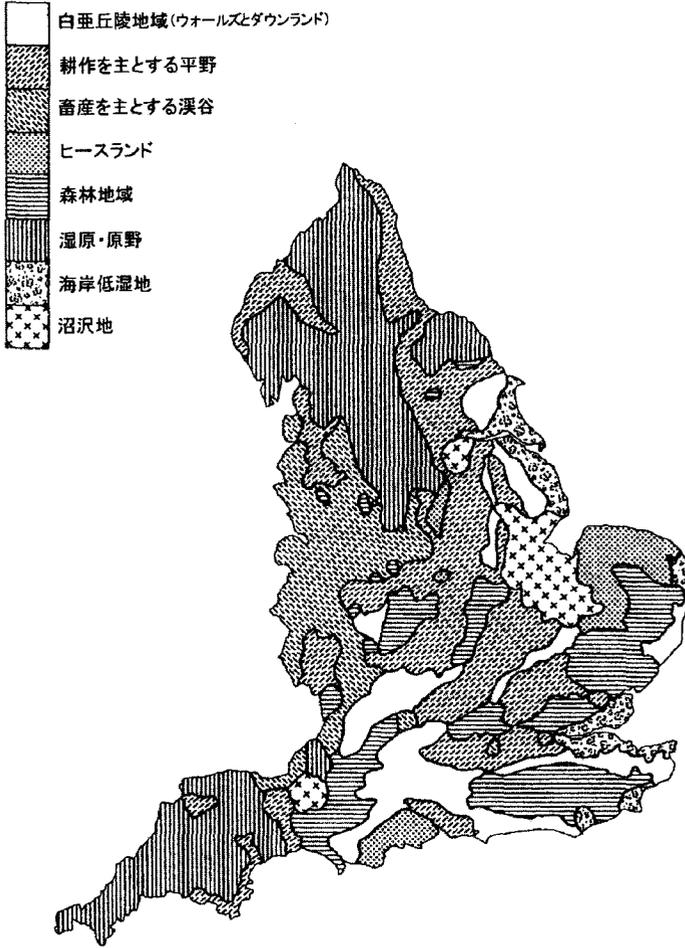
東北部のリンカンとその周辺、南部のケント、サセックス、ドーセットなどイギリス海峡沿岸地帯が主要羊毛産地だったことがわかる。このうちリンカンは長毛、ケントやサセックスなど南部は短毛の産地であった。つまりイギリスの羊毛生産の中心は、質的には西部のヘレフォードやコッツウォールズ周辺、量的には東北部のリンカン周辺と南イングランドの両地域だったといえることができる。これらの地域がイギリスのみならず西ヨーロッパの牧羊中心地となったのは、いかなる事情によるのかという問題について、さらに検討をくわえてみたい。

2 イングランド農村の地域区分

一般に牧羊は遊牧または移牧の形態をとることが多く、モンゴルのように農耕地が乏しく草原が牧畜に利用される場所では、牧羊は遊牧によっておこなわれてきた。これに対して、基本的に農耕社会の性格をもつ西ヨーロッパでは、牧羊はしばしば「移牧」の形態でおこなわれた。これは牧草を求めて、寒冷な山岳地と温暖な平野の間を季節的に移動する牧畜形態であり、スペインのカスティリヤにおける牧羊組合（メスタ）の南北間移動牧畜¹⁷⁾やスイスの山岳の牧草地「アルム」と平野の定住地との間の移動¹⁸⁾などがその代表として知られている。しかし、決して広大とはいえない島国イギリスでは、移牧のような粗放牧畜によって西ヨーロッパ最大規模の牧羊を維持していくことは、困難であったとおもわれる。イギリスで採用された牧畜の主要形態は、農民定住地の周辺における比較的狭小な面積での集約的放牧であった。こうした牧畜の形態を「定住牧畜」と呼ぼう。定住牧畜はヨーロッパの酪農や養豚などにも見られるが、牧羊においてこうした形態が最も広く普及していたのはイギリスであった。イギリスの牧羊業は定住集落の草地だけでなく、耕地も利用することによって、農耕と密接な結びつきをもつ畜産として発展したのである。

イギリスの牧畜と農耕との関連についてまず参照すべきは、ホームズやサー・スクによるイングランド農村の地域区分である。ホームズはイングランドの農村を大きく「ウッドランド」(woodland)と「チャンピオン」(champion)の二類型として把握した¹⁹⁾。「ウッドランド」とはかならずしも「森林」を意味し

図3 16-17世紀のイングランド農村地域区分



資料: Thirsk, England's Agricultural Regions and Agrarian History, 1500-1750, 1987, p.39.

ているわけではなく、ドイツ語のコッペル (Koppel) とほぼ同義とみられ²⁰⁾、農地が生垣の樹木で囲われた散村地帯のことである。「チャンピオン」は二圃制や三圃制のような開放耕地制を特徴とする集村地帯を指している。前者はイングランド西北部に多く、後者は東南部とくにミッドランドに多い。

他方、サースクはイングランドの農村地帯を大きく「高地」(highland) と「低地」(lowland) の二つに区分して、両者の境界線を「北東のティーズ河口と南西のワイ河口」を結ぶ線に求めている²¹⁾。西北部の「高地」は牛と羊の牧畜を主とし、東南部の「低地」は耕作と畜産の「混合農業」をいとなんでいた。また、「高地」では「囲い込まれた農場における個別農業経営」が支配的であったのに対して、「低地」では「共同体的基礎のうえで共同耕地、共同放牧地、耕作の共同規制」が優勢であった。

ホーマンズとサースクのとらえ方には、共通性がある。彼らの地域区分によれば、イングランド西北部の「ウッドランド」＝「高地」は畜産地帯をなすのに対して、東南部の「チャンピオン」＝「低地」はどちらかといえば穀作に重点を置く耕種地帯である。ここで注意すべきは、イングランドの中心的牧羊地域は畜産地帯の西北部の「ウッドランド」＝「高地」に属するのではなく、むしろ穀作に重点を置く東南部の「チャンピオン」＝「低地」に属するという点である。この点を検討するために、サースクによるもう少し細かな地域区分を参照してみよう。彼女は、16-17世紀のイギリス農村を図3のように8タイプに分類している。この地域区分は、農業の立地条件としての自然環境と景観を重視しているところに特色がある²²⁾。図3の8つのタイプは、それぞれ次のような特徴をもつ。

1. 白亜丘陵地域 (wolds and downland)

ウォールズとは高原を意味し、最もよく知られているのは西部のコッツウォールズであり、そのほかに東北部のリンカンシャーやヨークシャーにもウォールズの地域がある²³⁾。ダウンランドとはイングランド南部の丘陵地帯のことであり、東はケント、サセックスから西はハンプシャー、ドーセットにいたる広範な地域を含む。ウォールズとダウンランドの農地の多くは石灰質の「白亜」(chalk) と呼ばれる地層の上であって、牧羊と穀作を結合した「牧羊・穀作式農法」

(sheep and corn husbandry) がおこなわれる。

2. 穀作を主とする平野 (arable vale lands — champion)

南はオックスフォード、バッキンガム、北はリンカンシャーまでのミッドランド東部の平野を含む。その定住様式は、広い開放耕地を有する集村である。農業の中心をなしたのは穀作であるが、16世紀以降開放耕地の囲い込みが進展し、かなりの耕地が牧草地に転換されただけでなく、耕地と草地を相互転換しうる穀草式農法も導入された。

3. 畜産を主とする溪谷 (pastoral vale lands — woodland)

北部のチェシャーから南部のドーセットにいたるイングランド西部の「ウッドランド」地帯である。「ウッドランド」は、上述のように、樹木で完全におおわれているのではなく、放牧地、森林、耕地およびヒースが混在し、農地がしばしば樹木の垣根で囲まれている地域のことである。定住様式は散村 (hamlet) のほか、散居 (homestead) や集村 (village) も見られる。牛や羊の放牧に重点が置かれていた。

4. ヒースランド (heathland)

ヒースランドは乾燥したやせた砂地が多く、草はあまり繁茂せず、ヒースとハリエンシダが多い土地であり、東部のイーストアングリア地域の一部と南部のドーセット—ハンプシャーの地域がこれに含まれる。農法は白亜丘陵地 (ウォールズとダウンランド) の「牧羊・穀作式農法」と類似しているが、イーストアングリアのブレッklandでは耕地制度として「内畑・外畑制」(infield-outfield system) も見られた。

5. 森林地域 (forests and woodpasture)

イングランド南部から東部にかけて各地に分散し、狩猟地 (forests)、樹木で囲われた放牧地 (woodpasture) が大きな割合を占める。王室林は鹿狩りの狩猟地として利用されたほか、海軍の軍艦用の木材の供給源ともなった。東南部のケント、サセックスでは森林地域は「ウィールド」(the Weald) と呼ばれ、土地の三分の一は耕地、残りは草地として牧牛に利用された。

6. 湿原・原野 (fells and moorland)

北部のペニン山脈や西南部のダートムア、エクスマアなど、湿原が大きな割合を占める寒冷な高地の地域である。湿原は酸性土壌であるため、穀作には適しておらず、主に牛や羊の牧畜がおこなわれた。

7. 海岸低湿地 (marshland)

リンカン、ノーフォク、サフォク、ケント、サセックスなどの海岸にあって、古い時代より定住地が形成され、水路網によって排水がおこなわれるとともに、一般に堤防によって氾濫から守られた。オランダや西北ドイツの北海沿岸低湿地に似た性格をもつとみられ、牛、羊の飼育とともに、小麦栽培もおこなわれた。

8. 沼沢地 (fenland)

ウォッシュ湾周辺、トレント川流域の湿地であり、16世紀以降排水事業によって新しく開拓された地域である。漁獲、畜産とともに、排水によって干拓された耕地では穀物生産も可能となった。

これら8地域類型のうち、前節で確認された牧羊の中心地が属していたのは主に「白亜丘陵地域」(wolds and downland)である。この地域では「牧羊・穀作式農法」あるいは「混合農法」(mixed husbandry)が優位を占めていた。この農法は「ヒースランド」にも普及し、白亜丘陵地域ほどではないが、ここでも牧羊がかなり重要な意義をもっていた。そこで、上述の8地域のうちこれら二地域をとりあげて、牧羊と耕作との関連を検討してみよう。

3 白亜丘陵地域 (ウォールズとダウンランド) の牧羊

牧羊・穀作式農法が実践されていた丘陵地域の多くは、地質学的には「上部白亜紀層」に位置していた。白亜 (chalk) は泥質のやわらかくて白い微細な石灰粒からなる多孔質の堆積岩であり、その成分は主に太古の海中微生物 (coccolith), 有孔虫の遺骸や貝殻などの石灰質からなる。その地層の厚さは300-400メートルにも達し、イングランド南部および東部地域のダウンランドの採石場や道路の開鑿に露出するが、壮大な岸壁をなす海岸線で最も良くあらわれ、ドーヴァーの白い岸壁が非常に有名である。ちなみに、イギリスの雅称「アルビオ

ン」(Albion)は「白い国」を意味する。

イングランド南部の丘陵地は「ダウン」という名称のとおり、多くは傾斜地である。たとえば東南部のケント・ダウンの場合、約1億年前に土地が隆起し、やわらかい白亜をドーム状に押し上げ、これは徐々にその下にある砂岩を露出させた。ケント・ダウンの最大の特徴は、けわしい南向きの傾斜である。傾斜地における白亜の露出は海峡を越えて北フランスに及び、そこでも同じような土地利用と植生のパターンが見られる。傾斜地は、もともと東南部のほとんどをおおっていた白亜ドームの幾百万年の風化作用の産物である。けわしい傾斜地はいまなお浸食をうけ続け、その下に横たわる白亜の上の薄い表層土壌だけを残した。サウス・ダウンとノース・ダウンは、この浸食された白亜ドームの外殻として残っている。こうした傾斜地の表土はもろく、耕作などによって破壊をうけやすいといわれる²⁴⁾。

このような土質の丘陵地域では「牧羊・穀作式農法」あるいは「混合農法」(mixed husbandry)が優位を占めていた。この農法の基礎は、穀物耕作地における「羊の放牧柵」(sheepfold)にあった。「羊の放牧柵」あるいは「牧羊柵」とは、昼間は放牧地で放し飼いにしている羊の群れを、夜間だけ休耕地の一定区画に設置した柵の中に囲いこみ、羊が残した糞尿を穀物生育の肥料として利用する方法である。ウィルトシャー・ダウンの牧羊柵についてのケリッジの研究²⁵⁾によれば、一度に牧羊柵に入れられる羊の数は1,000頭にも達し、1頭について2平方ヤード弱の土地面積を当てたという。耕作地は開放されており、牧羊柵は耕地区画ごとに順番に移動した。開放耕地制においては耕地区画が混在していたので、各保有者の土地は順番に、そして多少とも一斉に糞尿を施肥することが可能だった。このことが、共同耕地制における土地混在の利点をなした。柵内で一夜を過ごした羊は、翌朝には丘を登って昼間の放牧地へ行った。牧羊柵による施肥がおこなわれた耕地は犁で耕耘され、播種された。播種後も牧羊柵が耕地に設けられることもあり、この場合牧羊柵は新しい播種地の締まりのない土壌を固めるのに役だった。穀物が収穫されると、再び羊群は刈り株を食べるために牧羊柵に入れられた。

ウォールズの土地も、白亜のダウンランドと似たような性質をもっている。ミッドランド東部のヨークシャーやリンカンシャーのウォールズは、「白亜丘陵」(chalk hills)を意味するといわれ、ここでも牧羊・穀作式農法が一般的であった²⁶⁾。他方、ヒルトンによれば、ミッドランド西部のコッツウォールズの溪谷の低地は粘土質だが、高地は魚卵岩の石灰岩(oolitic limestone)から生じた軽い土壌からなり、排水が容易で耕耘も簡単であるかわりに、土壌浸食の危険も大きかった。浸食を防止する伝統的な方法は、耕地に牧羊柵を設けることだった。犁で耕耘された土地に家畜が糞を踏み込んで、土を固めると同時にその肥沃度を回復させた。家畜はこうした有益な役割をはたすとともに、各地の織布業に羊毛も供給した。高原の開放的な放牧地は、もちろん大きな羊群の維持に重要ではあったが、コッツウォールズの羊毛が最も高く評価されたときでさえ、農業経営者の農業観は、基本的に羊と穀物の両者を保持することを重視したという²⁷⁾。

このように白亜丘陵地域では一般に非常に薄くてもろい性質をもっている表層土壌を維持するうえで、牧羊は重要な役割をはたした。草地は羊によって踏みしめられることによって、風雨による浸食から守られた。また耕地でも、牧羊柵内への多数の羊の密集は軽い土壌の肥沃化と踏み固めに役立った。ワーディによれば、羊は食肉や羊毛ではなく、牧羊柵を重視して選ばれた²⁸⁾。そのため、ウィルトシャーやハンプシャーの羊は大きく、骨張って、丈夫で、一日中ダウンを徘徊することができ、夜間に柵のなかに囲われると糞尿を落とした。あまり水を必要とせず、水分は草から摂取した。それは、樹木のない丘陵地で古くより飼われ、乏しい飼料、荒涼とした農村の条件に適し、放牧地間の長い距離を行き来できる羊であった。とはいえ、それは良質の羊毛と味の良い肉も産したという。

ウィルトシャー・ダウンの南に隣接するソールズベリ平原は、イングランドで最も広大なダウンランドといわれる。ソールズベリ平原については、農学者アサー・ヤングが1772年のイングランドおよびウェールズの農業視察旅行記のなかで触れており、デヴァイジズからソールズベリへの旅の道中で見た農村景観を次のように描写して、牧羊規模の大きさを強調している。

「農場の多くは600-800エーカーの耕地をもち、播種面積だけでも500エーカー

を超える農場もある。それらが平原で飼う羊の群れは、イングランドでも最大だとおもう。その羊の群は300-400頭から3,000頭に達し、一年中牧羊柵の中に入れて、この牧羊柵を毎夜移動させる²⁹⁾。」

だが、近代の農業改良は牧羊地を縮小し、牧羊・穀作式農法を廃止する方向をめざした。ケリッジによれば、ダウンランドでは17世紀から二圃制あるいは三圃制の休閑地へのカブやクローバーなど飼料作物の導入による近代的穀草式農法(convertible husbandry, ley farming)への転換が進められていた。ヤングは当時進行していた囲い込み運動の熱心な推進者だったから、開放耕地が残存していたソールズリ平原の牧羊と毛織物業に満足せず、次のように述べている。

「この地方ほど良い牧羊場を、私は見たことがない。緑は美しく、草地は一般に良質な牧草地であり、もしそうした草地が耕作地に転換したら、きわめて大きな意義をもつだろう。……(中略)……私はこの地区に1エーカーでも実際に不毛地があるとは信じられない。というのは、私が見た土はどこでも良質の軽いロームであり、きわめて良好な草を産し、世界のどこにも負けない良質穀物を生育させるからである。ダウンと牧羊地を擁護する口実としてよく挙げられるのは、羊毛の生産であるが、正確な計算をすれば、適切な割合の草地をとまなう耕作地の農場の優位がはっきりと証明されるのであり、いかなる地域の羊毛も工業生産者の雇用をうむだろうが、犁で耕す人口にはとうていかなわないのである。土壌に最も適した樹木を適度に植えて、生け垣で囲い込み、この広大な平原を農場に変えることは、驚くべき改善をもたらすだろう。生け垣も樹木も家屋もなく、わずかな羊飼いと羊の群れしかない現在とはまったく違った眺めが出現するだろう³⁰⁾。」

こうしたヤングの農業改良の基本線に沿って、ダウンランドでは囲い込みによる耕作地の拡大が進行した。その後の変化について、ソールズベリ平原の羊飼いハドソンは1910年にその回想録のなかで次のように述べている。

「最近100年間に起きた最大の変化は、疑いもなくダウンで犁が使用されたことである。黄金色の穀物、とくに小麦を7-8月に広い畑で見るのはたしかに喜ばしいことではあるが、犁で耕耘されることによってダウンは醜くされてしまった。

それは経済的観点からも過ちではないかとおもわれ、昔から数世紀にわたってゆっくりと生み出されてきた豊かな芝は、牧羊場とともに永遠に失われることだろう。非常に広大な未墾地は他所にもあり、とくにミッドランドの重い粘土の方が穀物には適している。高地ダウンの芝土の耕耘はしばしば破滅的結果をもたらし、密集した丈夫な芝によって保護された土壌は吹き飛ばされたり、洗い流されたりして、毎年やせていき、手入れをしても耕作の価値がほとんどなくなってしまう。クローバーはそこに育つかもしれないが、しだいに悪化を続けるか、あるいは借地人か地主がそれを養兔場に変えてしまうと、最悪の事態となる。それらがどれほどひどいものか、広大なダウンランドが大きな針金の柵と兎網で囲われ、雑草や苔が生え、いたるところ小獣によって乱暴に掘り返されるのである。しばらくは利益があがるかもしれないが、結局はひどい荒地になってしまうのだ³¹⁾。」

かつての広大な牧羊場は牧羊と穀作の混合農法の衰退、近代的輪作農法への転換とともに不要とされ、ソールズベリ平原では軍事演習場に変えられた。羊飼いはドソンはこの変化についても、次のように嘆いている。

「この高地ダウンの大部分は現在変貌をとげつつあり、かつての牧羊場が今では軍隊の演習場になっている。羊が姿を消したところでは、最上の芝生よりも歩きやすい芝土の滑らかさと弾力性が失われた。かつて羊は密集して草を食べ、ダウンに成長した草、クローバー、多数の小さなハーブなどすべてが、地面にはうように生育して花を咲かせた。」ところが「羊が姿を消すと、植物は牧羊による圧迫がとれて徒長するようになって、表土が粗くなってしまった」³²⁾。

同じような指摘は、ラッカムによってもなされている。彼によれば、ダウンランドのロイストンからフラムバラ・ヘッドまでの170マイルの草地は19世紀初期にほとんど絶滅してしまったという。南部ダウンランドはそれほど破壊されなかったが、ドーセットはその草地面積の半分以上を失った。白亜の土地の一部は耕地としては失敗し、草地に戻されたが、決して元どおりにはならなかった。破壊は19世紀半ばに再開され、しばらく期間をおいて、第二次大戦後もっと徹底的におこなわれた。現在のドーセットは1800年頃の白亜のダウンランドが12分の1

以下に減少し、1966年に全体で108,000エーカーと見積もられ、最近はさらに減っているといわれている³³⁾。

4 ヒースランドの牧羊

ヒースランドは東部のイーストアングリアと南部のドーセットの二カ所に限られ、丘陵地帯ほど広大ではないが、ここでも農業にとって白亜の地層が大きな役割をはたしていた。その代表はイーストアングリアのブレックランドであり、降雨が少なく、白亜の底土の上にやせた浅い砂地が表層をなしていた³⁴⁾。ブレックランドのゆるやかな傾斜面には白亜地層の露出と酸性の砂地が交互にくりかえす縞模様が見られ、水平な高原ではそうした縞模様のなかに、多角形の草地が多数点在することで知られる³⁵⁾。

ブレックランドはじめノーフォクの「軽い砂地のやせた土地」では、16世紀まで開放耕地制と牧羊・穀作式農法が優位を占め、これは地域全体の三分の二を占めていたという³⁶⁾。キャンベルによれば、羊は「歩く施肥機械」ともいうべき性格をもっていた。羊は春の出産期を過ぎると、共同家畜群に集められ、昼間は原野と牧羊場で飼養され、夜間は休閑耕地に柵で囲われ、その土は踏まれて糞尿と混ぜられた。開放耕地内部では羊は移動可能な「牧羊柵」によってコントロールされ、この牧羊柵は比較的小さな休閑地への放牧を可能とした。牧羊柵は耕地の施肥がその主要目的とされ、休閑地における乏しい牧草よりも耕地への利益の方が大きかったという³⁷⁾。

このようなイーストアングリアの牧羊は基本的に白亜丘陵地域のダウンランドやウォールズに類似していたといってもよいが、とくに17世紀以降の牧羊・穀作式農法は次の二点で異なる性格をもっていた。

第一に、イーストアングリアのヒースランドでは領主が農民の土地に牧羊柵を設置する特権をもち、この点が白亜丘陵地域と異なっていた。村落内の土地は2-3人の領主の羊の群のために分割され、それぞれの割り当て区分が「牧羊柵コース」(foldcourse)と呼ばれた。牧羊柵コースには開放耕地と未墾の共有地が含まれ、開放耕地では収穫後の秋と冬に放牧されることが多いが、夏季は主に

共有地に放牧された³⁸⁾。この牧羊柵コースの所有権は領主が独占し、農民の権利はきびしく制限されており、牧羊は領主の営利事業だったといわれる³⁹⁾。ただし、領主による牧羊柵コースへの羊の放牧は、農民の土地への施肥と土壌の踏みしめに役立ったから、その意味で耕作農民にとってかならずしも不利益だったわけではない。また、穀物収穫後の「シャック」(shack)といわれる期間には、村民たちは昼間の休閒地での放牧権をもっており、それ以外のときは若干の羊を領主の家畜群のなかに入れることも許されていた。アリソンによれば、牧羊柵コース制度のもとでの農民は家畜の飼料源を三つもっていたという。すなわち、1) 収穫畑の刈り株利用権 (shackage)、2) ヒースランドの共有地への放牧権、3) 領主の家畜群のなかへの一定数の家畜の投入権 (cullet right) である⁴⁰⁾。

第二に、イーストアングリアの牧羊・穀作式農法は丘陵地帯のような三圃制ではなく、むしろ「内畑・外畑制」(infield-outfield system)の枠組みのなかで実践された。比較的土壌が肥沃でないスコットランド、ウェールズや北イングランドなどでも内畑・外畑制が普及していたことが知られており⁴¹⁾、ドイツ西北部にもこれと似たエッシュ・カンブ制がみられ⁴²⁾、この耕地システムは全ヨーロッパ的の広がりをもつが、イーストアングリア地方のヒースランドの内畑・外畑制においては、1) 内畑、2) 外畑、3) ブレックという三種類の農地が区別された。「内畑」とは村内の古くからの永久耕作地であり、ここでは主に三圃制にしたがう農法が採用されていた。「外畑」と「ブレック」は村外に向けて新しく開墾された土地であり、ヒースランドにはあまり耕作に適さないやせた共有地が多いため、そうした土地は一時的耕作地として利用された後、もとの野生状態に放置されることが多く、これは「ブレック」(breck)と呼ばれた。「ブレックランド」という地名は、これに由来するという。開墾地の拡大とともにブレックはしだいに永久農地に転換され、短期間の穀作と長期間の牧草地とが交互にくりかえされる粗放な穀草式農法がおこなわれ、この農地は「外畑」として固定された⁴³⁾。

こうした牧羊・穀作式農法、領主特権としての牧羊柵コースおよび内畑・外畑制の結合がイーストアングリアのヒースランド地域の牧羊の特徴をなしていた。16-17世紀には領主の牧羊特権の強化によって、牧羊柵コースが拡大され、牧羊

業はその頂点に達したといわれる⁴⁴⁾。周知のように、イーストアングリアでは16世紀にフランドルから毛織物工が渡来し、長毛を素材とするウーステッド生産が都市ノリッジを中心に栄えたが、これは牧羊業の発展の刺激になったとおもわれる⁴⁵⁾。だが、ヒースランドは丘陵地帯と比べて羊の牧草地として優れていなかったため、良質の羊毛生産地とはいえず、中世以来羊毛供給の中心地としてとくに重要な役割をはたしたというわけではない。近代のノリッジのウーステッド産業も、かならずしも地元のヒースランド産羊毛を基礎として発展したとはいえないようである。

イーストアングリア地方のヒースランドでは17世紀以降囲い込みがおこなわれ、これが開放耕地制にもとづく内畑における牧羊柵コースの減少をもたらす要因となった。アリソンによれば、牧羊・穀作式農法の多くの教区では、小規模囲い込みと牧羊柵コースの廃止とは18世紀の議会エンクロージャー開始前から進行していた。内畑の耕地が個別に囲い込まれただけでなく、ヒースの土地と共有地も外畑として分割されて、囲い込まれた。内畑は大規模な借地としてまとめて借地農に貸し出され、新作物や新しい土地肥沃化の方法が羊の糞尿にとってかわり、カブが羊の飼料作物として栽培されるようになった⁴⁶⁾。こうした変化について、農学者 A. ヤングはイーストアングリアのヒースランドにも旅して、次のように述べている。

「この地域は、改良精神が住民をとらえる以前は、すべて未墾の牧羊場であった。そして、この改良精神は驚くべき効果をあらわした。限りない荒野、未墾の不毛地、羊以外にほとんどいない土地にかわって、農村はすべて囲い込み地に区分され、良く耕され、豊富な肥料が施され、人々が定住し、以前より百倍も多くを産出するようになったからである。こうした成果をあらわすのは、泥灰土の施肥である。全農村に豊かな泥灰土の鉱脈が走っているのです、人々はそれを掘って古い牧羊場に散布して、囲い込みによって農場を規則正しい輪作に転換し、改良によって限りなく収穫を得た⁴⁷⁾。」

その結果四輪作制が導入され、初年度に小麦、第二年度にカブ、第三年度に大麦、第四年度にクローバーが作付けされるようになった。だが、これによって一

挙に牧羊柵が廃止されたわけではなく、すべての冬作物に施肥または牧羊柵設置をおこない、「二晩の牧羊柵は1エーカーにつき12荷 (loads) の糞尿に等しい」といわれており⁴⁸⁾、囲い込み後もひきつづき牧羊柵が存続していたことがうかがわれる。東ノーフォクの肥沃なローム層の土地では1750年までにほとんどなくなったが、砂地の地区では1570年以前の牧羊柵の3分の2が18世紀にもなお残っていたと推測されている⁴⁹⁾。

結び

16世紀以来のイギリス毛織物業の大きな発展は、西ヨーロッパ最大規模の牧羊業なしにはかながえられない。だが、イギリスの牧羊はかならずしも毛織物業への羊毛の生産と販売を第一の目的として発展したわけではなく、何よりも耕種農業の必要性から生まれた。牧羊の中心をなしたのは、牧畜が盛んなイングランド西北部の高地ではなく、むしろ穀物生産に重点を置く東南部の低地、とりわけ白亜丘陵地域であった。白亜丘陵地域では、軽くて薄い耕地表土の施肥と踏みしめを目的として牧羊・穀作式農法、牧羊柵が導入され、穀物収穫と牧羊が不可分の関係をなす「混合農法」として発展をみた。同じように牧羊・穀作式農法、牧羊柵が普及したイーストアングリアのヒースランドでは、牧羊自体は白亜丘陵地域ほど盛んにはならなかったが、牧羊・穀作式農法からノーフォク農法として知られる近代農法への発達が見られた。

このような牧羊・穀作式農法は、イギリス以外のヨーロッパ諸国にはあまり普及しなかった。なるほどドイツでも三圃制の休閑地への施肥を目的とする家畜放牧がおこなわれ、一部に牧羊柵 (Pferchen) の慣行があったことはたしかである⁵⁰⁾が、イングランドの白亜丘陵地ほど体系的な牧羊と穀作の結合による「混合農法」は普及をみなかった。それは、ドイツ農村のほとんどの土地が地質学的に白亜丘陵地域とは異なって、牧羊に強く依存する農法を必要としなかったためとかがえられる。

こうして、イングランドの白亜丘陵地域における牧羊、穀作および毛織物業の三位一体的結合は、近代イギリス経済固有の成長パターンの基礎をなしたといっ

でも過言ではない。白亜丘陵地域の農耕、牧畜および工業の結合様式は「白い国」(Albion)と呼ばれたイギリスの生態系のなかで育まれたものなのである。

- 1) Trow-Smith, Robert, A History of British Livestock Husbandry to 1700, London 1957, p. 88.
- 2) Power, Eileen, The Wool Trade in the English Medieval History, Oxford University Press 1941.
- 3) Ibid. p. 16.
- 4) 大塚久雄『近代欧州経済史序説』, 1981年.
- 5) 佐久間弘展『ドイツ手工業・同職組合の研究—14~17世紀ニュルンベルクを中心に—』, 1999年.
- 6) 松尾展成「ザクセンにおける牧羊業の興隆と衰退」, 『岡山大学経済学会雑誌』第3巻第2号, 1971年, 同「ザクセン牧羊業の発展と農民経済」, 大野英二・住谷一彦・諸田実『ドイツ資本主義の史的構造』, 1972年.
- 7) 拙稿「19世紀初期のドイツ北海沿岸低湿地(マルシュ)における農村景観と農業の特質」, 一橋大学『経済学研究』43, 2001年9月.
- 8) Bowden, Peter J., The Wool Trade in Tudor and Stuart England, London 1962.
- 9) Mulhall, Michael G., The Dictionary of Statistics, 1892, p. 15, 30.
- 10) Jacobeit, Wolfgang, Schafhaltung und Schäfer in Zentraleuropa bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts, Berlin 1987.
- 11) 松尾「ザクセンにおける牧羊業の興隆と衰退」, 前掲.
- 12) メリノ羊の普及過程については, 大内輝男『羊蹄記 人間と羊毛の歴史』, 1991年.
- 13) 船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』, 1967年.
- 14) Ponting, Kenneth G., The Woolen Industry of South-west England, Bath 1971, p. 7.
- 15) Bowden, The Wool Trade, p. 29.
- 16) Martin, Luc, The Rise of the New Draperies in Norwich, 1550-1622, in: The New Draperies in the Low Countries and England, 1300-1800, Oxford 1997.
- 17) Klein, Julius, The Mesta. A Study in Spanish Economic History 1273-1836, Harvard University Press 1920. 芝修身「16世紀カスティーリャ王国における移動性牧羊業の対立—法令面よりの検討—」『アカデミア 経済経営学編』第59号, 1978年, 立石博高「十八世紀スペインの移動牧畜業」, 都立大学『人文学報』167号,

- 1984年。五十嵐一成「15-17世紀の移牧業とメスタ」,「札幌大学教養部紀要」,第27号,1985年。
- 18) Jacobeit, Schafhaltung und Schäfer.
- 19) Homans, George Caspar, English Villages of the Thirteenth Century, New York 1960. pp. 13-17.
- 20) 「コッペル」については、とくに Schwerz, J. N., Anleitung zur Kenntniß der Belgischen Landwirtschaft. 1.Bd. Halle 1807.
- 21) Thirsk, Joan, The Farming Regions of England, in: H.P.R. Finberg (Ed.), The Agrarian History of England and Wales, vol. IV. 1500-1640, Cambridge University Press 1967, pp. 2-6.
- 22) Thirsk, England's Agricultural Regions and Agrarian History, 1500-1750, 1987. 彼女は、The Agrarian History of England and Wales, Vol. V 1640-1750, I. Regional Farming Systems, ed. by Thirsk, Cambridge Univ. Press. 1984. でも、やや異なった視点から農業の地域区分をおこなっているが、ここでは前者を採用した。というのは、前者は自然環境を重視する視点から地域区分をおこなっており、拙稿の立場に近いからである。
- 23) Jennings, Bernard, A Longer View of the Wolds, in: Thirsk, op. cit. 1987. Harold Fox, The Wolds before c. 1500, in: Thirsk, op. cit. 1987.
- 24) The Kent Downs Landscape. An Assessment of the Area of Outstanding Natural Beauty. A landscape assessment prepared by Rebecca Warren and Valerie Alford for the Countryside Commission and Kent County Council, 1995
- 25) Kerridge, Eric, The Sheepfold in Wiltshire and the Floating of the Watermeadows, in: The Economic History Review, Vol. VI, No. 3, 1954.
- 26) Jennings, A Longer View of the Wolds, p. 64.
- 27) Hilton, R. H., A Medieval Society. The West Midlands at the End of the Thirteenth Century, London 1966, p. 14. コッツウォールズの自然景観については、The Cotswold Landscape. A landscape assessment of an area of outstanding natural beauty, prepared by Cobham Resource Consultants 1990.
- 28) Wordie, R., The South: Oxfordshire, Buckinghamshire, Berkshire Wiltshire, and Hampshire. in: Thirsk (Ed.), The Agrarian History of England and Wales, Vol. V-I, 1984, p. 329.
- 29) Young, Arthur, A Six Weeks Tour, throughout the Southern Counties of England and Wales (1772), Third edition, London 1903, pp. 184-6.
- 30) Ibid. pp. 193-7.
- 31) Hudson, William Henry, A Shepherd's Life. Impressions of the South Wilt-

- shire Downs, 2004, pp. 11-12.
- 32) Ibid. pp. 7-8.
- 33) Rackham, Oliver, *The History of the Countryside. The classic history of Britain's Landscape, flora and fauna., Eight's impression*, London 2004, p.340.
- 34) Postgate, M.R., *Field Systems of East Anglia*, in: *Studies of Field Systems in the British Isles*, ed. by Alan R.H. Baker and Robin A. Butlin, Cambridge 1973, p. 282.
- 35) Rackham, op. cit. pp. 283-5.
- 36) Allison, K. J., *The Sheep-Corn Husbandry of Norfolk in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, in: *The Agricultural History Review*, Vol. 5, 1957.
- 37) Campbell, Bruce M.S., *The Regional Uniqueness of English Field Systems? Some Evidence from Eastern Norfolk*, in: *The Agricultural History Review*, Vol. 29, 1981.
- 38) Alison, pp. 15-16.
- 39) Bailey, Mark, *Sand into Gold: the Evolution of the Foldcourse System in West Suffolk, 1200-1600*, in: *The Agricultural History Review*, Vol. 38, 1990, 41.
- 40) Allison, *Sheep-Corn Husbandry of Norfolk*, p. 21. イーストアングリアにおける領主牧羊区域特権については、ほかに、三好洋子『イギリス中世村落の研究』, 1981年, Simpson, Alan, *The East Anglian foldcourses: Some Queries*, in: *The Agricultural History Review*, vol. VI, Part 2, 1958. を参照.
- 41) Gray, Howard Levi, *English Filed Systems*, Harvard University Press 1915. グレイは内畑・外畑制を民族的に「ケルト的システム」とみなしたが、今日ではそれは一般に否定されている。
- 42) 拙稿「オルデンブルクの共有地分割と農地開発」, 一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, No. 39, 1998.
- 43) Postgate, *Field Systems of East Anglia*, pp. 300-1.
- 44) Bailey, *Sand into Gold*, p. 45.
- 45) Martin, *The Rise of the New Draperies. Holderness, B.A., The Reception and Distribution of the New Draperies in England*, in: *The New Draperies in the Low Countries and England, 1300-1800*, Oxford 1997.
- 46) Alison, *Sheep-Corn Husbandry of Norfolk*, p. 28.
- 47) Young, *A Six Weeks Tour*, pp. 3-5.
- 48) Ibid. pp. 9-10.
- 49) Holderness, *East Anglia and the Fens: Norfolk, Suffolk, Cambridgeshire*,

- Ely, Huntingdongshire, Essex, and the Lincolnshire Fens in : Joan Thirsk
(Ed.), The Agrarian History of England and Wales, Vol. V- I, 1984. p. 230
- 50) Jacobeit, Schafhaltung und Schäfer, p. 21.

(一橋大学大学院経済学研究科教授)